続編

１．卒論作成段階

10 月に入って、大学祭も一段落した後、幸恵は田中と会うことになった。家の近くにある、ロードサイドのカフェで待ち合わせた。お互いに挨拶をした後、田中はしげしげと幸恵を眺めていた。幸恵は少し恥ずかしい気もしたが、田中に何か考えがあるのではと思い、何も言わなかった。すると、田中が話し出した。

「しばらくお会いしていないが、しっかりした良い顔になりましたね。」

「そうですか」

「何か自信を感じさせる雰囲気になっている。仕事を任せたい顔ですよ。」

これを聞いて、幸恵は気分が良くなった。田中が話しを続けた。

「藤田さんは、会社ではどんなキャラを考えていますか？可愛い系かな？キャリア系かな？」

「総合職なのでしっかり仕事をしたいです。」

「それなら、服装も締まった感じだし、カバンも大きめになりますね。その場合には、A5 のシステム手帳を持つのが良いと思います。会社生活では、色々な記録をとる必要があり、リフイルを入れ替えることが出来る、システム手帳は便利です。但し一寸良い物を買っておいたほうが良いですね。持っている人間に風格が出てきます。早く購入して、使い慣れた方が良いですね。」

手帳が、風格を持つというのは、何となく理解できたので、幸恵はうなずいた。

「また、手帳を補うために、ポストイットのメモ帳を持つのも良いですね。」

「電車の中なんかでも、思いつくことがるので、それはよいですね。やってみます。」

田中は笑って付け加えた。

「これが解るのは、藤田さんが色々考えているからですね。ただし、一寸付け加えておくと、ノートのサイズと言うのも、大切ですよ。小さい画面で慣れていると、それだけしか考えない癖がついてしまいます。せめて、A5 の見開きぐらいで、色々と見て欲しいと思います。」

幸恵は何となく納得したので、うなづいた。田中は続けた。

「話は服装に戻りますが、リクルートスーツでも、上着の裾が長いものが良いですね。パンツスーツでも、しゃがんで背中が出るのはもう一つですね。そのようなことに気を使っていると、大胆な動きが出来ないです。服装一つでも動きが変わります。」

「たしかに、考えてみます。」

「これもうっかりすると、セクハラになりそうだが。」

「確かにそのような面もありますね。でも私は、好意を持って私のためにしていただいている話しを、セクハラと言うことで壊したくないです。」

「その考えは、大切だし、会社生活では得をします。相手の好意を十分引き出す能力ですね。もう一つ、付け加えると、ジーンズ姿の意味を知っていますか。」

「解りません。」

「アメリカでは、ソフトウエアのベンチャービジネスの創業者は、よくジーンズと T シャツで仕事をしています。これは疲れたとき、そのままで床に寝転がって寝るためです。つまりジーンズやスニーカーは、汚れを怖がらずに動き回ると言う意思表示です。仕事のとき、現場に出る時には、ジーンズ・スニーカーを準備しておくと言うのは、汚れてもかまわないと言う意思表示になります。これも、一つのできる人の条件でしょう。」

「服一つでも違うのですね。」

「これも考え方ですがね。メーカーの工場見学だから、高価な靴を履く人もいれば、スニーカーで歩き回れるようにする人もいる。どちらが好まれるかは、会社の風土によります。しかし自分の考えがしっかりしている人は、相手がとがめても理由を説明できます。この違いは大きいですね。」

幸恵は、何となく納得してしまった。田中は話しを変えた。

「さて卒業研究はどうですか？」

「苦労しています。この前も、母の里に行って聴き取りをしてきました。」

これを聞いて、田中はにやりと笑った。

「今シンクタンクで求めている人材は、文化人類学出身者と言う話は知っていますか？」

「いいえ？なぜですか？」

「一昔前では、複雑系で予測ができるといって、数学出身者が持て囃されました。しかし、今の流

行は、フィールドワークに慣れた、文化人類学の出身者です。あなたの学校は、そのあたり敏感に対応しているようですね。」

「そのような意味があったのですか。あまり深く考えませんでした。」

「ところで、フィールドワークで得た情報の加工法は、解りますか？」

「どうしてよいか解りません。」

「それなら、KJ 法で有名な、川喜田二郎さんの話が参考になります。絶版になったと思うが、『パーティ学』と言う本で、ネパールの奥地等を調査した時、『現地の人たちの一見ばらばらで、無意味に見える行動も、その後ろには合理的な理由がある。』という発想で、それを探す KJ 法を編み出しています。」

「無意味と見える行動にも、実はその人たちには合理的な理由がある。大切なことですね。心しておきたいと思います。」

「ただし、それが始まった時には合理的だが、現在は環境が変わって無意味になったのに、惰性で動いていることもあります。これは注意してください。でも、このようなことが、すんなりと解るのは、貴女が良く考えているからですね。」

「そうですか、でも、こういう方法は、中々教えて貰えないものですね。」

「例えば、日経ビジネスアソシエなどには、色々な知的手法が紹介されています。方法を知らないと始まりません。しかし、知的な手法は、自分で使いこなせる段階まで、使い込むことが重要です。クロールの手と足の動きの説明を聞いても、泳げないのと同じですね。」

「解りました。とりあえず教えていただいたようにして、今まで集めた情報を見直してみます。」

「手帳の使い方や、ポストイットメモの使い方だけでも、今までより効率的に考えることができます。このような改善の経験が重要です。自分の今の状況を、客観的に見て、常に改善していく。この積み重ねが、将来大きく実を結びます。」

幸恵は、常に改善と言う話は、部活で苦しい思いをしながら、鍛錬した経験とも通じるので、納得してうなずいた。田中は、もう少し付け加えた。

「卒論で調べ、まとめて報告する経験は、企業に入ってからも、何度も行う仕事です。その時どれだけ深く考えて、自分の独創を付加するか、これが総合職の値打ちですね。とりあえず出来ることから、始めてください。」

幸恵は、これを聞いて何となく力を得た感じがして、元気に家に帰り、母に報告した。すると母は複雑な笑みを浮かべて、冷たく言った。

「それならあなたは、これから自立するのね。では、手帳とリクルートスーツは、バイトで貯めたお金で出してくださいね。」

冬休みの計画が、少し狂ってしまった、幸恵であった。

２．卒論提出後

12 月の末に無事、幸恵は卒業論文を指導教官に提出した。教官の評価も良かったので、少し気をよくしていたら、田中から一度会いたいというメールを受け取った。年末のあわただしい時期で時間調整は難しかったが、田中は自分のことを考えてくれていると思っているので、幸恵は前と同じカフェに行った。田中は、既に来て幸恵のことを待っていた。幸恵が席に着くと同時に、田中が切り出した。

「忙しい所を時間をとってくれてありがとう。卒業論文も終わって、勉強は一段落しましたか。」

「はい、単位も揃いました。」

「さて、そこで一つ相談があります。これから私がお話しすることは、貴女にとっては余計なことかもしれませんが、一寸聞いてください。」

幸恵は、今までの自信に満ちた田中の言い方とは違うので、少し戸惑いがあったが、今までの指導によって信頼感が生じていたので、とりあえず聞いてみようと思った。

「お願いします。」

「実は、これからも勉強を続ける方法についてです。理系の人が技術者として社会で生きていく場合には、私は自信を持って学習を継続せよと言います。しかし文系の場合には、一寸迷う面もあります。MBA の勉強をしても、本当に仕事で生かすには難しいものがあります。」

「確かに、今の勉強が直接仕事にどう関係があるのかは、正直ピント来ません。」

「しかし、勉強を継続する能力を身につけておけば、今後色々な状況に対する対応が柔軟になるこ

とも確かです。私も、技術者から事務屋の仕事に変化した場合にも、基本的な知識を勉強したことで、幅広くしかも深く納得して、仕事をすることができました。」

幸恵も、学校での勉強がそのまま仕事に繋がるとは、思えなかったので正直に聞いてみた。

「学校の勉強は、どうすれば仕事で役に立てることができるのですか。」

田中は、説明を開始した。

「学校の勉強は、どちらかと言うと、理想的な状況での話が多く、現実の複雑な問題には、他にいろいろ考慮しないといけない障害があります。理系、特に工学の場合は、比較的このような応用が見えやすいですが、文系の場合は経営学部でも、現実の複雑さが理論の適用を難しくしています。」

「実際の問題の解決法を、教えてくれないのですか。」

「MBA の教材では、事例研究などもやっていますが、どんな場合にも使えると言う手法までは、洗練されていないようですね。工学の設計なら、『エンジニアリング・アナリシス』と言う古典的な教科書があるのですが、文系で決定版は中々見当たらないです。」

幸恵は少し暗くなったが、田中が何か切り札を隠しているような気がして、聞いてみた。

「それではどうしたら、良いのですか。」

すると田中は、にやりとして続けた。

「どのような状況にも、確実に対応できる手法を求めるのは、難しいです。しかし、自分の知識の使い方を、訓練して適用範囲を広げることはできます。具体的には、新聞の記事を読んで、自分の知識で、どこまで説明できるか、常に考えることです。まず、できることから始めることが、大切です。最初から完全なものを目指してはいけません。部分的に説明できることがあれば、それを見出しなさい。」

「説明ですか？」

「そうです、説明です。無理して新しいことを考える必要は、最初はありません。『独創的なことを提案しろ。』と言うのは簡単です。しかし、いきなり本当に良いものを、創出するのは難しいと思います。まず最初は、現実にあるものを説明しないといけません。説明のために、今までもっている知識を使う体験をして下さい。自分の今もっている知識が使えると、思うことが大切です。」

「新聞の記事は、どのような記事が良いですか。」

「別に１面、経済面、または社説でないといけないと、こだわる必要はありません。芸能面やテレビ番組ですら、社会や経済の現象が見えることがあります。どのような芸が、世の中に受け入れられているのか、これを説明するには、社会心理学や経済面など色々な切り口があります。言い忘れましたが、説明は部分的で良いのです。完全な説明を作るために悩んでいると、何時まで待っても話は出来ません。部分的な説明が出来たら、自分で自分を褒めて見なさい。」

「自分を褒めるのですか？」

「そうです。自分を認めることが大切です。さてここで、もう一度社会人が勉強すると言うことについて、よく考えてみましょう。」

幸恵は正直言って、社会人の勉強と言うことがわからなくなってしまったので、その旨を正直に言った。

「でも、勉強はしないといけないのでありませんか？日本の企業は、終身雇用できちんと社内教育するのが特徴だと、習いましたが。」

「それは一面では正しいです。しかし、貴女の勉強のイメージはどのようなものですか？」

「それは、講義を聞いたり本を読んだり、レポートをまとめたりです。」

そこで、田中は自分のシステム手帳から、１枚の紙を取り出した。そこに書いてあったのは、

OJT（On the Job Training）	：業務を通じた訓練、実務を行いながら身につける
OffJT(Off the Job Training）	：業務を離れた訓練、坐学などの集合研修やｅラーニング
自己啓発	：自主的に行う勉強。自宅での学習等。

と言う３項目であった。田中は説明を続けた。

「貴女のイメージの勉強と言うのは、この中では OffJT のイメージでしょうね。しかし社内教育という場合には、OJT の要素が大きいのです。新しい仕事を経験する。その時に指導者が説明する。

また必要なことを、自分で調べる。このような経験で身につく知識が多いのです。また、OffJTでも、仕事に直結した内容を主に教えます。」

これを聞いて、幸恵は安心して言った。

「それなら、会社に任せておけば、必要な知識は、教えてもらえるのですね。」

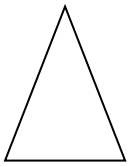
そこで、田中の目つきが鋭くなった。

「そう、必要なことはね。しかし、深みのある理解ができるかと言うと、それは別物です。」

幸恵は、何かありそうとは思ったが、それを言葉にできなかったので、じっと田中の顔を見ていた。田中は少し和らいだ顔つきになり、説明を続けた。

「確かに何をすべきかと言う、HowToだけはきちんと教えてくれます。しかしその意味を深く理解するためには、基礎となる理論を駆使しないといけません。一応大学でこれは身に付いているはずなんです。例えば、会社では色々な規則を作ります。そこで、このような図を描きますが、意味は解りますか。」

と言いながら、田中は下の三角形を書いた。



幸恵は正直に答えた。

「解りません。」

田中から次の質問が飛んだ。

「パンデクテン方式について知っていますか。」

「民法の講義で聞いたような気がします。日本の法律はパンデクテン方式だとか…」

「パンデクテン方式というのは、まず前の方に一般論を記述し、後ろにはより具体的な議論を書いていく方式です。抽象論から展開していく論法を応用することで、記述していないことまで解釈できる方式です。三角形の上の部分が一般的・抽象的な部分で、下に行くほど具体的な展開を示しています。」

「そのように説明してもらうと、よく解ります。」

「さてここからが大切なのですが、会社で規則を作る立場になったとします。そこで、従来の前例や、記述や登録の規則を見れば、それなりのものが作れるでしょう。しかし、このような法律の精神を知っている場合と、どこか違う仕事になるでしょう。特に、『抽象のレベルが間違っている』などの指摘は、今までの議論がわからないと納得がいかないでしょう。このように、しっかりした知識を持っておくと、落ち着いて仕事ができます。しかし、このような知識は、会社が教えるのではなく、自分の努力で身につける必要があります。」

幸恵は、今までの自分の勉強について、甘さを指摘されたように感じて、少し暗くなった。すると、田中のフォローが直ぐにきた。

「実は、私も会社に入ったときに、学校での勉強が役に立たないと言うことで、悩みました。試験があれば、合格点は取れる。事実、ある資格試験も会社に入ってから、合格しました。しかし、仕事の上で使えない。そこで出合ったのが、『エンジニアリング・アナリシス』と言う本です。これは、工学分野の本ですが、物理学の基本的な原理を使って、設計する手順を示した本です。特に、数学に関しては、数式の意味を上手に説明していました。これで、数学も使えるのだなーと思いなおしました。増える、減ると言う関係を予測するだけでも、効果があります。」

「それで、説明する練習とおっしゃったのですね。」

「そうです。説明することで、知識が使えることを実感できます。さて、話しを戻しますが、このような基礎知識の勉強は、自分の時間を使った自己啓発で行うことが多いのです。」

「つまり仕事に必要なこと＋αと言うことですね。」

「そうです。そして自己責任で身につけたものが、本当に使えるものになります。」

「確かに自分で買ったものは大切にしますね。」

「しかし、会社に勤めだしてから、自分の時間を使って勉強すると言うことは、今貴女が思っている以上に大変です。そのためには、勉強すると言う意欲を、維持しないといけません。」

「私は、やる気には自信があります。」
「その場合は、逆にドンキホーテとなって、なんでも突撃してしまいます。自立するとと言うことは、有限の資源を責任を持って配分することです。時間は貴重な資源です。そこで、このような発想を身につけて下さい。」
そこで田中は、下の式を書いた。

$$価値＝\frac{得る効果}{投資資源}$$ …VE(Value Engineering)の基本式の応用

「この式は、企業人としては忘れてはならないことです。自分の使える資源は有限です。その資源で、最大の効果を得る。自分の勉強でも同じ発想です。まず『得る効果』が大きくないと自主的な勉強する、意欲が湧きません。一方、そのための投資がどれほどか。現在は、教材はインターネットで比較的容易に、手に入れることが出来ます。しかし、自分の時間はやはり貴重です。期待できる効果に比べて、楽なことしか出来ません。学校の勉強のように、強制させられるものがないだけ、自分で意識付けをする必要があります。」
「部活等とも同じですね。」
「そうーなんです。企業が採用時に部活の事を聞くのは、自主性について確認の目的もあります。ただし、部活は好きなことですから、動機付けは必要ありません。しかし勉強は、動機を見つける必要があります。ここで、勉強を進める上での階層図を見てください。」
田中は、次のような図を示して、説明を続けた。

応用知識……具体的な分野対応の知識
↑
基礎的知識……数学、物理学等等
↑
基本スキル……読み書き、IT スキル
↑
意欲・価値観
↑
体力・気力

「普通の人には、勉強のイメージは、『数学』のような特定分野の勉強でしょう。この図では、『基礎的知識』にあたります。しかし、会社で OJT や OffJT での勉強は、『応用知識』が中心になります。『基礎的知識』は、学生時代に既に吸収していると言う前提です。しかしながら、不足している部分もあります。そこを自己啓発で補うと、HowTo だけでなく、深く理解することが出来ます。しかしながら、このような勉強をする『意欲・価値観』を自分で引き出す必要があります。前に書いた図では、『得る効果』を明確にする必要があります。『勉強した結果、このような良いことがある。』これを自分で描く必要があります。」
「与えられるのではなく、自分で見つけると言うことですね。」
「そうです。一方、『投資資源』については、『基本スキル』が重要です。例えば、同じ本を読む場合でも 1 時間で読める人と、5 時間で読める人とでは、勉強を開始するハードルが違います。また、想像力を鍛えておくことも重要です。意欲をかきたてるためには、明確な成功イメージを持つことが効果的です。このように、スキルが意欲を引き出すこともあります。」
「私も部活の練習の時には、成功した時のイメージを持つようにしていました。」
「そのとおり。それを勉強で行うのです。なお、意欲については、2 種類必要ですがわかりますか。」
「どういう意味ですか。」
「まず、勉強に着手する意欲です。勉強を始めるまでには、かなり抵抗があります。このためには、勉強をした結果がどのような効果をもたらすか、しっかりイメージする必要があります。その次に、持続するための仕組みが必要です。」

「続けることは難しいのですか？」
「そうです。自主的な活動と言うことは、自分で簡単に止めることが出来ます。そのために、持続する意欲をかき立てる仕組みが必要です。そのために、計画を立てること、ノートを作ることが重要です。」
「計画とノートですか？」
「そうです。計画を立てると、目標がしっかりします。特に中間目標を、明らかにしておけば、途中でも成果の確認が出来ます。中間目標でも達成したら、自分を褒めましょう。これが意欲を継続させる、一つの仕組みです。」
「計画はわかりますが、ノートはなぜですか？」
「ノートを作ることは、勉強の結果が『見える形』で残ります。見える成果は、自分の自信につながります。なお、ブログに書き込むのもひとつの手です。」
「つまり中間的なものも、見える成果として、自分を評価すると言うことですね。」
「そうです。自分を客観的に見て、成長していると言えるようなら、その後の成長も約束されています。そのため、『見える形』で成果を出すことが重要です。なお資格取得ということも、ソトから見えるので、励みにはなります。ただ資格のための勉強は、それだけの上滑りをする危険性があります。私の経験では、『資格の勉強を兼ねて、その分野の一般知識を整理する』と言う姿勢で臨んだほうが良かったです。」
幸恵は、厳しい道に踏み込んだと思ったが、もう後戻りはできないとうなづいた。田中は、まだ話しを続けた。
「もう一つ付け加えておきましょう。勉強に必要な資源を、できるだけ少なくする方法です。資源と言うのは、まず時間です。つまり、速く勉強する方法です。そのためには、勉強のスキルを身につけるのです。」
「前にも聞きましたが、小論文の訓練等ですか。」
「そうです。小論文のときに使った、速読、ノート作成の能力は、これからも鍛えておいてください。それから、面接の訓練で相手の立場を想像することも行ったでしょう。就職活動自体も、色々なスキル訓練の場であったのです。このような努力を徹底して活用する。これも立派なスキルです。なお、速読の力をつけるために、これから毎日新聞を読むようにしてください。」
「新聞ですね。時間を計るのですか？」
「そうです。そして、気に入った項目の要約を作りましょう。さらに自分の意見も書き加えれば、もっと良いです。社会では、メールなど多くの文書情報が来ます。これを早く処理すれば、それだけ他人に対して有利になる。処理速度を上げれば自分の時間が増える。このような努力を惜しんで、時間の割に仕事が多すぎると、嘆いている人も多いですね。一時の努力を惜しんで、一生苦労する。バカらしいことです。」
「解りました。これからの時間を有効に使って、最後に笑うようにします。」
幸恵は、田中と別れて、就職後の自分に不安を抱きながら帰宅した。すると、田中からメールが届いていた。

３．自宅にて
田中のメールは、次のような内容であった。
「藤田幸恵様
田中和夫です
本日は、詰め込みすぎましたが大丈夫ですか。さて、勉強のスキルに関しては、言葉で話すより文面で見ていただいた方が良さそうなので、メールを送ります。
まず、勉強のスキルですが、大きく分けて、以下のものがあります。
(1) 情報入手関係（速読、IT 利用の検索技術、記憶法）
(2) 情報出力関係（文書作成関係）
(3) 推論・発想（論理的思考法と創造性手法）
(4) 時間活用（特に細切れ時間の活用）
(5) 対人スキル（他人との関係、自分自身の意欲付け）
この内、(1)～(3)は、今までの就活経験や卒業研究等で、色々身についているでしょうし、必要性

も判っていると思います。また(5)の対人スキルは、貴女は、少し自分について、厳し過ぎるかもしれませんが、よい物を持っていると思います。少しは面接訓練や、ゼミの皆さんとのやり取りでも鍛えられたでしょう。しいて言えば、(2)の情報出力ですが、勉強した成果をノートにまとめる。その上で、成果を直感的に解るように、短い言葉で表現するように、心がけてください。
さて、今回一番言いたいことは、時間の活用です。学生時代に一番有利なことは、自分の時間がたくさん、あるということです。勉強したいと言う時、1 時間単位で時間が取れます。しかし会社生活では、このような時間は中々取れません。しかし、5 分や 10 分の細切れ時間は、逆に多く発生します。一寸した会議で人が揃うまで、5 分など…。このような細切れ時間を生かすことも重要です。
貴女は、卒論の時にポストイットで、思い付きをメモする方法を身につけました。その応用として、勉強で細切れ時間を活かす方法があります。それは、ノートの活用です。ノートに全体図をまず書いておきます。そのノートを持ち歩き、思いついたことや、追加で得た情報を書き加えていく。これは細切れ時間と、細切れ情報の活用です。このように全体像を持っておいて、細かいものを逐次加えていくことを、積み重ねると、3 年先には大きな違いが出てくると思います。
A5 のシステム手帳は、ノートとしても使えますね。
それでは、貴女の今後の活躍を祈念しています。」

幸恵は、母の利恵にこの話しをした。すると、利恵は緊張した顔つきになって、幸恵に家の前の道に出るように指示した。幸恵が出ると、家の前の道で、利恵は 5 分程度で空手の型を演舞した。幸恵は、空手は素人であったが、流れるような美しいが、力の入った突きのたびに腹に響くものを感じた。演舞が終わったあと、呼吸を乱さずに利恵は言った。

「これは、私が高校時代に、日本一になったときに演舞した五十四歩の型よ。それ以後は、誰にも見せたことはないの。でも、若い時に真剣に身につけたものは、裏切らない。そして、型でまとめてあるから、個々の技を分けて練習することも出来るの。これも、田中さんの教えとおなじね。これから厳しいかもしれないが、最後までやり遂げなさい。」

幸恵も母の想いが痛いほどわかったので、静かにうなずいた。